

瓦の話(1)

日本の瓦・中国の瓦-瓦の話あれこれ

須藤 定久¹⁾

1. はじめに

日本の屋根といえばやはり瓦屋根が連想される。瓦は、防火性、通気性、断熱性、遮音性、耐久性などの点ですぐれた屋根材として、いまや日本の建物になくはないものとなっている。瓦の生産も全国各地で行われており、有力な地場産業の一つにもなっている(第1図)。

全国で作られる粘土瓦は年間15億枚前後である。1枚の瓦を作るために約3kgの粘土が必要としても、45億kg、つまり450万tの粘土が消費されていることになる。粘土資源も無尽蔵ではない、枯渇したり、あっても開発ができなくなったり、不足が深刻となる地域もあるようだ。

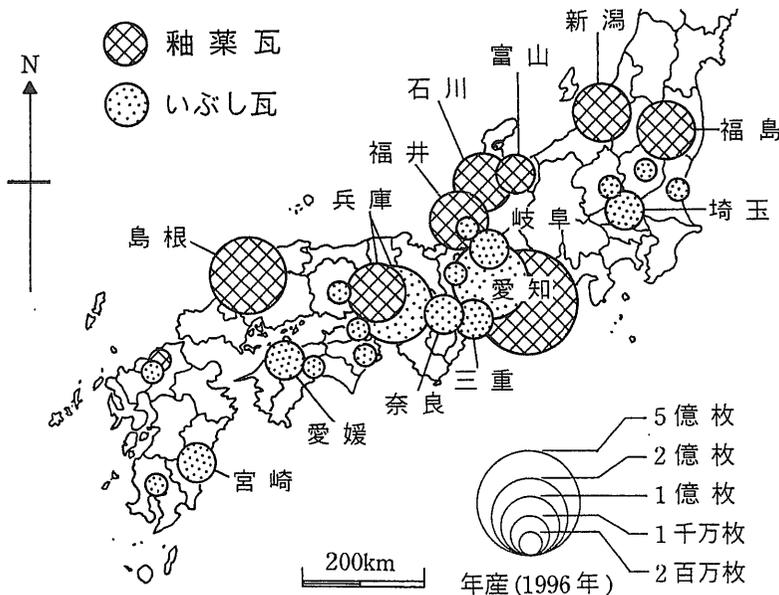
「今後いかに瓦粘土を確保していくか」、こんな

問題を考える中で、主な瓦産地の近況を見学させていただき、そして瓦のあれこれを耳学問した。瓦と一口にいってもさまざまなものがある。葺き方や瓦の形から見れば大きく東洋型と西洋型に分けられ、材料から見れば粘土瓦、セメント瓦、スレート瓦などに区分される。

瓦のいろいろをまず瓦の葺き方や形から、あれこれとみてみよう。

2. 東洋瓦の歴史

東洋の瓦はもちろん中国が発祥の地であり、ここから朝鮮半島を経て伝来し、それが各地でさまざまに進化・発展してきたものである。まず、東洋の瓦についてみてみよう。



第1図
日本の瓦産地。寒冷な東北地方から北陸・山陰地方では陶器瓦が、温暖な関東から近畿・瀬戸内・九州地方ではいぶし瓦が多く作られ・使われる。全国陶器瓦工業組合連合会提供の統計に基づいて作成した。

1) 地質調査所 資源エネルギー地質部

キーワード：瓦 粘土瓦 陶器瓦 いぶし瓦 東アジア

(1) 中国で見た瓦の原型

今から12年前に中国の江西省で、旅の途中に車を止めたところに瓦工場があった。写真を撮らせてもらっていたら、警察官がとんできて、「ここは外国人には解放されていない地域だから、すぐに立ち去れ」といわれ、すぐに車に戻って旅を続けた

ことがあった。ここで、東洋の瓦の原型を見たような気がする。工程の一部しか見られなかったが、それをまず紹介してみよう(写真1参照)。

この瓦工場は江西省鷹潭市の郊外の丘陵地にあった。平坦地に木造瓦葺きの工場があり、うしろの丘の斜面に登り窯が配置されていた(写真1A)。

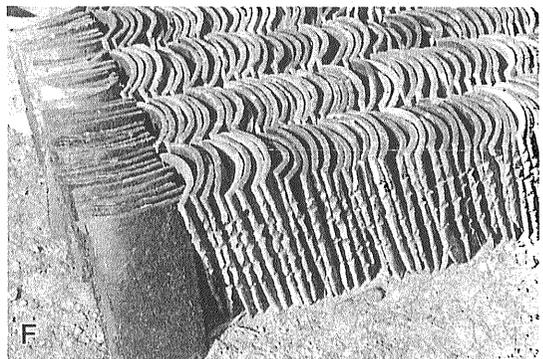
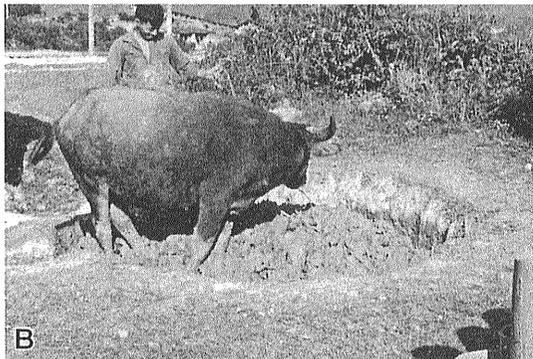
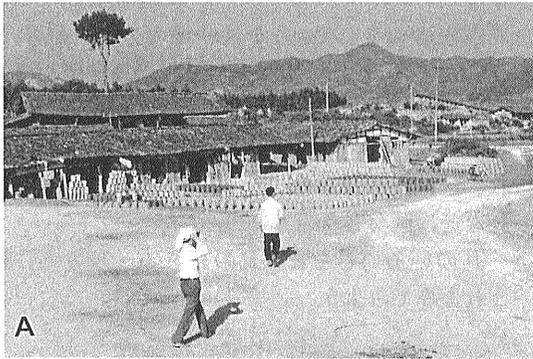


写真1 中国で見た瓦工場 A:瓦葺きの瓦工場,その庭先には焼成を待つ瓦が並べられて乾燥されている。向こうの丘の斜面に登り窯が作られている。B:田んぼから掘り出された粘土は牛に踏ませてよくねりあげる。C:粘土はロクロを使って、底のぬけたバケツのような形に形成され、乾燥される。円筒の四方にミシン目が入れている。D: 登り窯で焼成される。E・F: 焼成された円筒は4つに割られて4枚の瓦となる。この丸瓦を交互に重ねて、屋根が葺かれる。

工場の庭の隅には直径3.5m、深さ50cm程の窪地が作られていた。この中に田んぼの土が入れられ、これを牛にふませてねりあげる作業が行われていた(同B)。

この粘土を手回しロクロの上で円筒形に成形するらしいが、残念ながら工場の中を覗く前に警察官が来てしまった。庭には成形された円筒がズラリと並べられ乾燥されていた(同C)。円筒といっても径が一方でやや小さくなっており、ちょうど底のぬけたバケツのようなものである。これの四方にミシン目のようなあなが点々とあけられていた。

これを乾燥して、登り窯で焼く(同D)。表面が軽く熔けて遮水性のある陶器ができあがる。これをいれておいたミシン目にそって割るとわん曲した4枚の陶板、つまり瓦ができあがる(同E、F)。この瓦を交互に組み合わせて屋根を葺いていくわけである。

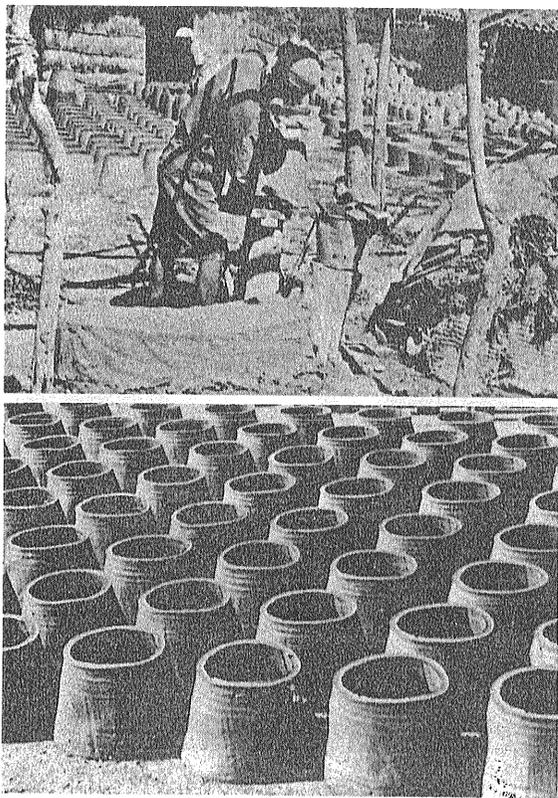


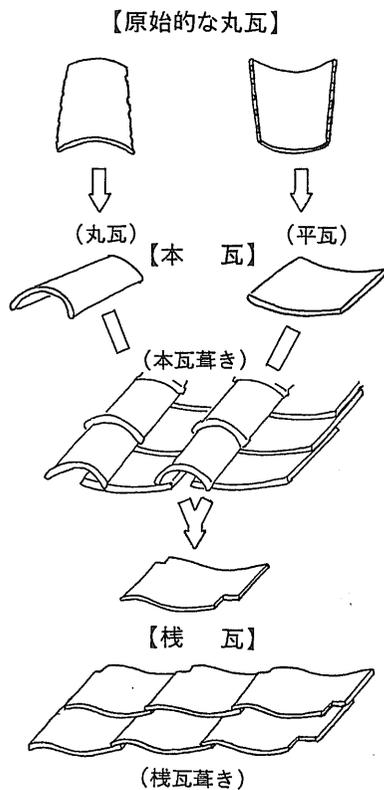
写真2 石垣島における瓦の製造。Delos (1954)による。1946年当時の様子である。成形作業(上)と庭で乾燥される瓦(下)が撮影されている。

これが東洋の瓦の原型であろう。中国でも地方都市や農村部の民家ではこの瓦を多くみかけた。また、このような瓦は琉球へ伝わり、石垣島などでは戦後まで作られていたようだ。終戦直後のアメリカ軍による琉球調査報告書に石垣島における同じような瓦の製造風景の写真を見ることができる(写真2, Delos, 1954)。

このような原始的な瓦はその後どんな進化をたどったのだろうか。

(2) 中国の瓦「本瓦」

この原始的な瓦はその後、次第にわん曲の程度の少ない幅の広いものとわん曲の大きな幅の狭いものとが作られるようになった。それは、その組合せにより、より広い範囲をより容易に葺くことができるからのようだ。やがてこれらが「平瓦」と「丸瓦」となった(第2図)。



第2図 東洋瓦の歴史。原始的な丸瓦は本瓦へ、更に棧瓦へと進化した。田中(1980)の付図を参考に作成。

この丸瓦(男瓦ともいわれる)と平瓦(女瓦ともいわれる)の組合せで屋根をふくのが「本葺き」と呼ばれ、これらの瓦は「本瓦」と呼ばれる。本瓦の出現は紀元前700年の春秋時代に遡るといわれ、これにより寺院などの大型屋根の建設も容易となった。

この本瓦は仏教とともに朝鮮半島を経て、日本へも伝えられてきた。西暦588年に百済の国から4人の瓦博士が来日して、飛鳥寺の瓦を焼いたのが最初だといわれている。しかし、それ以前にも高句麗から伝わった瓦が使われていたようだ。607年に法隆寺が建設される頃には瓦の製造は完全に国産化されていたと言われている。

奈良時代以降、各地に寺院(国分寺・国分尼寺)が建設され、これと共に製瓦技術が広まり各地で瓦が焼かれるようになった。

この本瓦は、寺院や城郭の屋根(写真3)に使わ

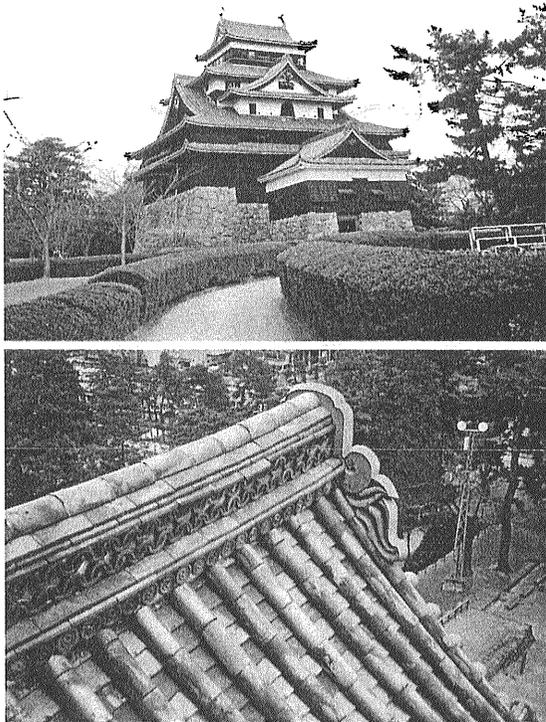


写真3 松江城天守閣と瓦。姫路城について、日本で第2位の規模を誇るという天守閣(上)。屋根は平瓦と丸瓦を組み合わせた本瓦葺きである。鬼瓦は木に銅板を貼ったものが使われている(下)。

れつづけたが、一般の家屋用には使用されることはほとんどなかった。この本瓦葺きは、平瓦の重なり合う部分が多く(写真4)、大変に重い。このために一般の住宅ではこの瓦の重さに耐えることのできる屋根を作ることは難しかったのだ。

(3)日本の瓦「棧瓦」

1674年、瓦に大きな革命がおこった。今の滋賀県大津・三井寺の瓦職人だった西村半兵衛という人が、平瓦と丸瓦を一体化し軽量化することに成功したのである。この瓦は「棧瓦」と呼ばれ、現在住宅用として広く利用されている瓦なのである(第2図)。

この瓦の発明により技術的には瓦屋根の民家への普及が可能となったが、当時の江戸幕府の儉約思想のため瓦の利用は長い間制限された。

八代将軍「吉宗」の代となり、度重なる江戸の大火を防ぐ防火屋根材として民家への利用が許可され、商家の屋根として普及していった。明治に入り、一般住宅にも使用されるようになり、日本全国

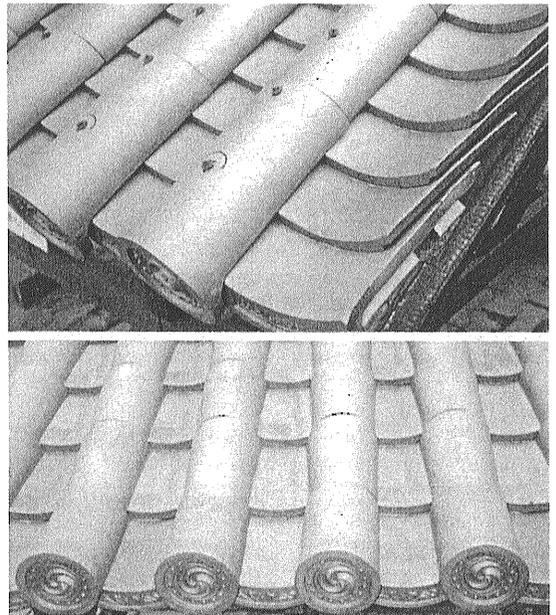


写真4 本瓦葺きと簡略型の例。上が本瓦葺き瓦で、平瓦の重なり具合がよくわかる。下は丸瓦と平瓦を一体化した簡略型ニューカワラ。

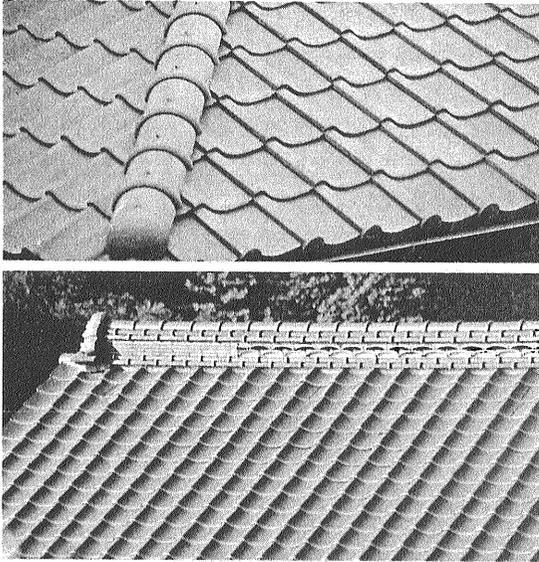


写真5 日本の住宅に一般的に使われている棧瓦の例。上は棟に丸瓦を使った簡略型、下はのし瓦を使った伝統的なもの。

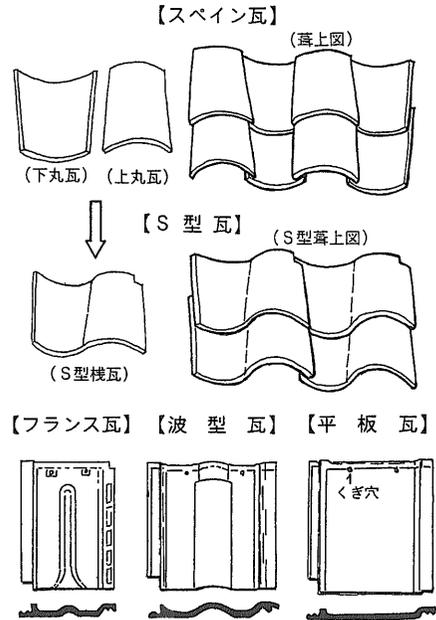
に棧瓦が広く普及することになった。

日本の住宅の屋根を彩る瓦の大半はこの「棧瓦」であり、これは日本人が発明した日本の瓦「和瓦」なのである(写真5)。

3. 西洋瓦の系譜

明治維新以後、文明開化の流れの中で、ヨーロッパ式の瓦も輸入されたり、国内でレンガとともに製造されたりした。この時に入ってきたのがフランス瓦(フレンチ型とも呼ばれる)とスペイン瓦(スパニッシュ型とも呼ばれる)であった。フランス人ジェラルドが横浜で焼いたジェラルド瓦は特に人気が高かったという。また、スペイン瓦は丸瓦を上下交互に重ねていくもので、東洋の原始的な瓦と同じ方式であるが、大正時代に三河地方で、丸瓦二枚を一枚にした新しい瓦が発明された。断面が「S」の字に似ていることから「S型瓦」と呼ばれるようになった(第3図、写真6)。

その後、鹿鳴館に代表されるレンガ造りで西洋瓦を葺いた洋館が盛んに作られ、一世を風靡した。しかし、この西洋式の建築物は、関東大地震で大被害を受け、耐震性のないことがわかり、すっかり衰退した。これとともに西洋瓦もほとんど忘れ去



第3図 西洋瓦の系譜。スパニッシュ瓦はS型瓦に、フランス瓦は平板型や波型の瓦へと進化した。田中(1980)の付図を参考に作成。最下段は瓦の断面。

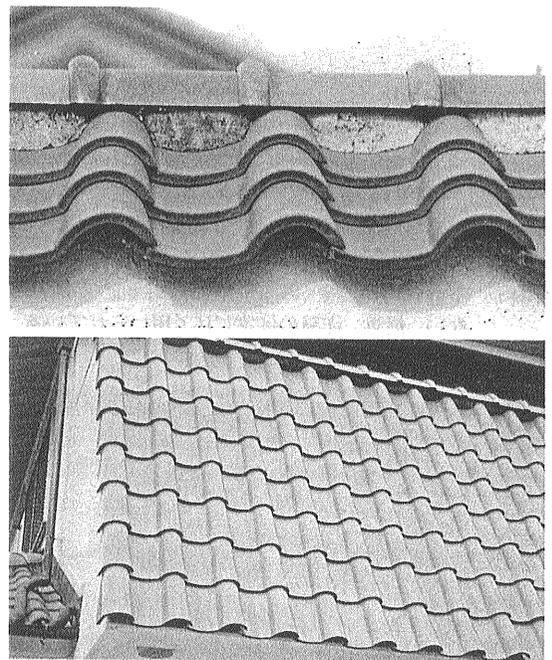


写真6 「S型瓦」の使用例。上は塀の屋根に使われた例。施工性を向上させるために、下丸瓦に相当する部分の丸みが小さくなっている。下はS型瓦葺きの商店の軒。上丸瓦部の作るたての模様が本瓦葺きに似た感じになる。

られてしまった。

第二次大戦後の復興期に、フランス型のセメント瓦が作られ、広く利用されたことから、西洋瓦の良さが見直され復活した。その後、平板型のフランス瓦のスタイルを原型に、さまざまな平板瓦や波形瓦が製造されるようになった(第3図、写真7)。

4. ニュー・カワラの流れ

近年では、一般住宅のデザインも和風、欧風、アメリカ風、折衷型と多様性を増しており、それに対

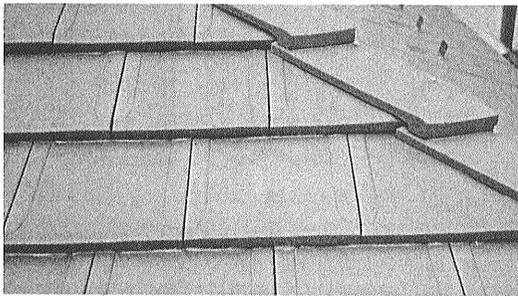


写真7 平板瓦の例。全くの平板型であり、凹凸がほとんどない。最近、洋風の住宅に広く用いられている。



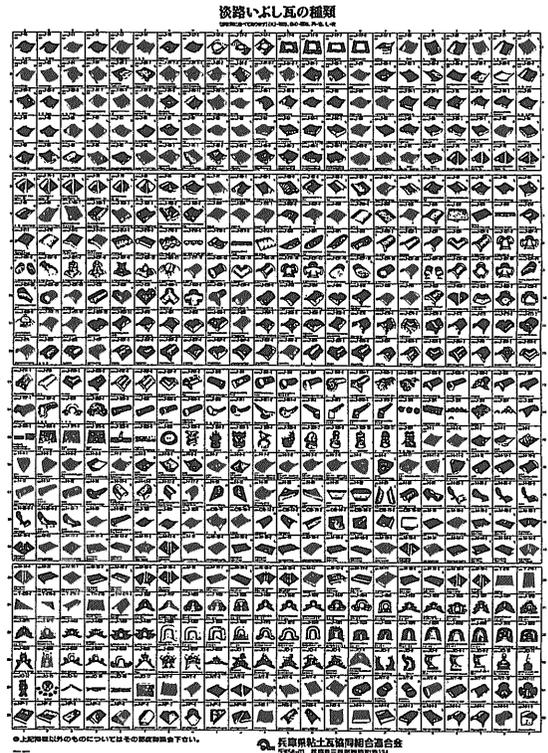
写真8 ガラス製の棧瓦。4～6枚が1セットとして使われ、明かり取りの天窓となる。遠目には天窓があるようには見えない。

応して瓦も従来の本瓦、棧瓦、S型瓦のほかに、次のような新しい、ユニークな「ニュー・カワラ」が作られるようになってきた。

平板瓦：最近の洋風住宅では平板瓦を使って、瓦の厚さを感じさせないフラットで急傾斜な屋根が盛んに作られている(写真7)。遠目には、陶器瓦とは思えない外観である。今後は、さらに薄く、大きな、施工性の良い平板瓦が出現してゆくことになるだろう。

ガラスの瓦：瓦屋根をとうして、外の明かりを取り込むことのできる透明なガラス製の瓦が作られている。瓦と同じ形・規格で作られており、普通の瓦の中に混ぜて葺くことができ、4～6枚がまとめて使われることが多い(写真8)。

ニュー本瓦：本瓦の丸瓦と平瓦を一体化したもので、いわば新しい棧瓦ともいうべきものが作られている。本瓦とかわらない外観だが、本瓦に比べて重量が30%も軽量化されており、お寺の屋根などに使われだしている(写真4)。



第4図 さまざまな役瓦。兵庫県粘土瓦協同組合連合会が作った102cm×72cmの大きなポスターには550種の役瓦が印刷されている。

5. 特殊な部分を葺く「役瓦」

中国式の「本瓦」にしても、日本の瓦「棧瓦」や西洋式の瓦にしても、基本の瓦だけでは屋根を葺き上げることはできない。特殊な部分を葺くのに使われる形の異なるさまざまな瓦が必要であり、これらは一般に「役瓦」と呼ばれ多種多様なものがある(第4図)。主なものには、次のようなものがある(第5図)。

・棟部分---平板状の「熨斗瓦(のしがわら)」を重ねそのうえに「丸瓦」が載せられ、両端には「丸止瓦」か「鬼瓦」が使われる。

・軒先部分---「軒瓦」が使われる。軒瓦には丸飾りのついた「万十軒瓦」とつかない「一文字軒瓦」がある。

・けらば部分---屋根側方の端の部分のことで、「袖瓦」が使われる。

などなどである。

6. 瓦の原料・製法と種類

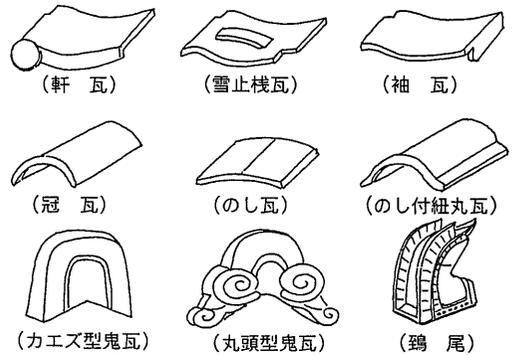
瓦をその原料から種類分けすると「粘土瓦」、「セメント瓦」、「スレート瓦」などに分けられる。それぞれの特徴や種類などを見てみよう。

(1) 粘土瓦

粘土を平板状に成形して焼いて作ったのが粘土瓦で、瓦といえば粘土瓦を指すことが多い。価格が高いものの、防火性、通気性、断熱性、遮音性、耐久性などの点ですぐれた屋根材として、日本の住宅用屋根材の40~45%程度を占めているといわれている。製法により大きくいぶし瓦、塩焼瓦、釉薬瓦、無釉薬瓦などに分けられる。

A. いぶし瓦：いぶし銀のような色とつやをした瓦である。粘土を成形して瓦を焼くが、その最終段階で窯の煙を出す穴を閉じて松薪や松葉を入れて焚き口を閉じる。すると窯の中は酸素が不足し、炭素が水分と化合して炭化水素となり、瓦の表面に付着して膜をつくる。この膜がいぶし銀のような色とつやをもたらすのである。こうしてつくられるのが、いぶし瓦である。瓦にこの膜をつけることを「くん化」という。

現在では、瓦を焼く場合トンネル状の窯が使わ



第5図 主な役瓦。田中(1980)の付図を参考に作成した。

れる。その最後の段階で、小型の窯に移され、ガスを多量に送り込んで還元状態をつくりだして、くん化することが行われるようになり、大量生産が可能となった。

B. 塩焼瓦：赤瓦とも呼ばれる。焼成の最終段階(温度1100~1200℃)で、窯の中に瓦1万枚に対し、食塩160kg前後を燃料と共に数回に分けて投入する。すると食塩はガス化・分解し、粘土中のアルミナや珪酸と反応し、珪酸ナトリウムとなり瓦の表面に赤褐色のガラス状の膜をつくる。

この膜が大変強く、寒冷地での凍害にも強いことから、日本海側の降雪地帯を中心に広く焼かれてきた。焼成がむずかしいことから最近では釉薬瓦におきかえられつつある。

C. 釉薬瓦(陶器瓦)：粘土を成形・乾燥させたものに釉薬(ゆうやく、うわぐすり)をかけて焼いた最も一般的な瓦で、陶器瓦とも言う。赤・青・緑・黒などさまざまな美しい色を出すことができるのが特徴である。

大型のトンネル窯による大量生産の方式が早くから確立され、安価に供給されるようになったことから、粘土瓦の生産量の70%が釉薬瓦で占められるようになった。

D. 無釉瓦(素焼瓦・窯変瓦)：粘土を成形・乾燥させたものをやや高温で焼いて、透水性を小さくした素焼きの瓦である。本文の最初に述べた原始的な瓦がこのタイプであるが、近年住宅や建築物にも自然志向が強まったことから、素焼きの素朴さ・あたたかさが見直され、復活してきた。

(2) セメント瓦

コンクリートで作った瓦で、粘土瓦同様の厚みがあり、独特の重厚感がある。モルタルを押し出し成形して作ったコンクリート瓦、モルタルを金型に詰めてプレス成形したプレスセメント瓦などがある。粘土瓦に比べて、価格が安く、寸法精度が高く施工性がよいなどの特徴があるが、塗装のメンテナンスが必要である。

主に和瓦や平板瓦が作られ(写真9)、塗装により、いぶし瓦の風合いを持たせたり、青や赤など鮮やかな色に塗装されて利用されている。粘土瓦と同じような厚さであり、遠目には粘土瓦と区別できないものも多い。

(3) スレート瓦

スレートは本来「粘板岩」、薄くはがれる泥質岩のことで、古くから屋根材としても世界各地で利用されてきた。日本でも宮城県登米地方の美しいスレート葺きの屋根が有名である。

最近では天然のスレートに代わって、セメントに石綿を混ぜて固めて作った板状の素材が建材として広く使われるようになり、スレートと言えばこの人造の建材を指すようになってしまった。このスレートで作った瓦がスレート瓦である。

粘土瓦やセメント瓦に比べて薄く、軽量で、施工性も良いが、塗装などのメンテナンスが必要である。洋風の平板瓦や波型瓦が多くつくられているようだ。最近、アメリカ生まれのカラフルなスレート瓦「カラーベスト」が、人気を呼んでいるようだ。

7. 瓦のサイズと葺き方

(1) 瓦のサイズ規格

瓦のサイズは1坪(3.3m²)を葺くのに必要な枚数で呼ばれる。現在、日本工業規格(JIS)では5つのサイズ、つまり64、56、53A、53B、49の5つの規格が定められている。各規格のサイズは表のとおりである。

瓦のサイズ

名称	外形寸法	(実効寸法*)
49形	315mm×315mm	(245mm×275mm)
53A形	305mm×305mm	(235mm×265mm)
53B形	295mm×315mm	(225mm×275mm)
56形	295mm×295mm	(225mm×255mm)
64形	280mm×275mm	(210mm×240mm)

* 外形から隣接瓦で覆われる部分を除いた実質的に屋根材として働く部分の大きさ。

かつては64,56など小型の瓦が使われることが多かったが、現在では53が主流であり、49も多くなってきているようだ。53型には三州瓦を中心に採用されている53Aと石州瓦などで採用されている53Bという2つの規格が存在している。

(2) 瓦の葺き方(工法)

瓦を葺く工法は大きく2つに分けられる。「土葺き工法」と「引掛葺き工法」であり、これらの中間的な「引掛馴染み葺き工法」がある。

土葺きは屋根の野地板の上に、切り藁を混ぜた粘りのある土をのせ、この土をクッションにして瓦の歪みを修正しながら、土の粘性で貼り付けていく工法である。昔からの伝統的な工法で、適切な

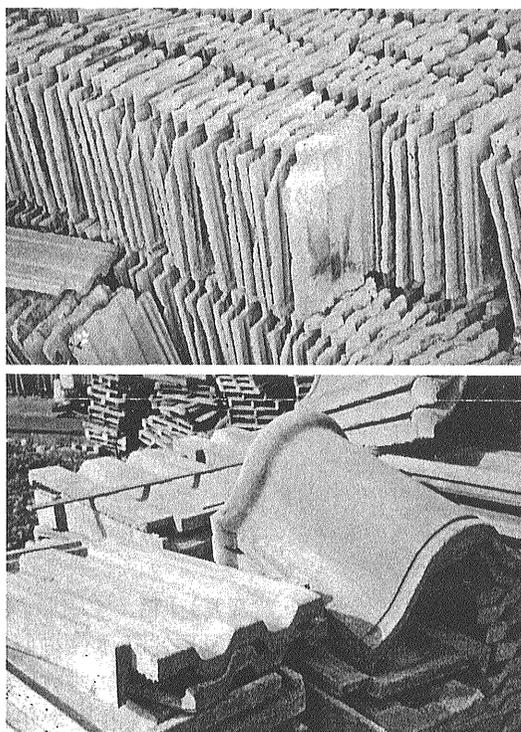


写真9 セメント瓦の例。上は薄手のフランス型、ベトナム北部で撮影。下は厚手の波型瓦、台湾中部で撮影。

材料と施工により、安定した美しい屋根ができるといわれている。

引掛葺きは、瓦の幅にあわせて屋根に取り付けた棧木に瓦の下に付けられている突起部を引っかけて葺く方法である。瓦がずれにくい、屋根が軽量化できる、くぎや針金で棧木に固定できるなどの利点がある。

引掛馴染み葺きは瓦を安定するのに必要な部分にのみ土を使う方法で、上記2者の長所を取り入れた最もすぐれた工法といわれている。

瓦の厚さは一般に15~20mm、重さは2.8kg前後ある。屋根1m²あたりの瓦の重さは45kgになる。これを土葺きした場合、使われる土の重さは最大50kgであり、1m²当たりの屋根材の重さは95kgとなる。一方、引掛葺きの場合、土を使わないので45kgだけである。引掛馴染み葺きでは1m²あたり60kg程度となる。

近年では、施工性がよく、軽量で、風や雪・地震などに対して強いといわれる引掛葺きが主流となっている。さらに、災害に対してより強い屋根を求めて、瓦の形、瓦を止める釘の長さや材質、針金の材質や結線の結わえ方、などにさまざまな工夫が凝らされており、「防災瓦」と銘打った瓦も販売されている。

8. 東アジア各地の瓦

東洋の瓦には、中国で生まれ育った「本瓦」、日本人が発明した「棧瓦」とがあることをお話したが、東アジアの各地ではどんな瓦が使われているのだろうか。アルバムをめくって見たが瓦が写った写真はあまり出てこない。写真の見つかった地域から紹介してみよう。

(1) 沖 縄

本土と違った異国情緒をもった沖縄。代表的な建物といえば「首里城」に「朱礼の門」、やはり本瓦葺きの屋根である。沖縄の屋根といえば赤い瓦を白い漆喰(しっくい)で固めた屋根が連想される。沖縄本島南部の名勝地「玉泉洞」の民族村に作られた伝統的な沖縄の民家の屋根はやはり赤い瓦を白い漆喰で固めた本瓦葺きである(写真10)。

本瓦葺きであることは、中国に近く、中国文化の



写真10 沖縄の瓦屋根。(上)復原された首里城正殿の屋根は大型の瓦を使った本瓦葺き。(下)赤瓦を白い漆喰で固めた沖縄の伝統的な民家の屋根だが、明治22年までは一般住宅には赤瓦は禁止されていたので、歴史は比較的浅いものだという。

影響を長く、強く受けてきたことの証であり、漆喰で塗り固めるのは台風の強風に対抗するための沖縄の人々の生活の知恵なのであろう。

(2) 中 国

北京の中心部「故宮」の屋根も、郊外「頤和園(いわえん)」の屋根も、そしてハルビン、杭州、南昌、広州など、どの街でも寺院などの大きな建物の屋根はすべて立派な本瓦である。

しかし、下町の民家や古いアパートの屋根などには昔ながらの原始的な丸瓦が使われていることが多いようだ。鉱床調査で訪問した浙江省青田県の招待所や付近の建物、ろう石鉱山の建物、そして江西省東部、上祝瓷石の粉碎工場や民家、瓷都・景德鎮の瓷器工場の大きな屋根、みんな原始的な丸瓦が使われていたのを印象深く記憶している(写真11)。

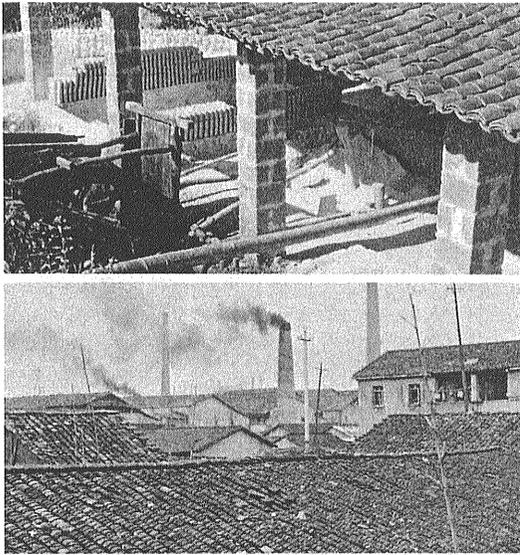


写真11 中国で見た屋根瓦. 上は江西省東部, 上祝瓷石の粉碎工場, 下は瓷都・景德鎮の瓷器工場の屋根. いずれも原始的な丸瓦が使われていた.

(3) 韓国

地方都市では一般の民家でも瓦屋根を見ることが出来る. 光州市の下町を写した写真には赤い本瓦の商家があちらこちらに写っている.

南東部の古都「慶州市」では古い街並みが保存されており, 瓦屋根の街並みを見ることが出来る. これらの屋根は本瓦葺きで, いぶし瓦が多い.

大田市近郊の名刹「東鶴寺」. もちろん, いぶし瓦の本瓦葺き. 丸瓦と寄進者の名前を書いた大きな平瓦とが境内の一角に置かれていた(写真12).

慶州市の南東方にある世界遺産の寺「仏国寺」の門前で, 瓦葺きの工事に遭遇した. 屋根の上に切り藁を混ぜた粘土を載せて, 高さや角度を調節しながら平瓦と丸瓦を交互に並べて葺いていた(写真13). 瓦は大型の本瓦で, もちろんいぶし瓦である.

(4) 台湾

台湾では都市とその周辺では1戸建て住宅はなく殆ど集合住宅(アパート)となっており, 瓦の利用は寺院などに限られている. 台湾の代表的な建物といえば台北市の「故宮博物院」, 青い色の本瓦葺きである.

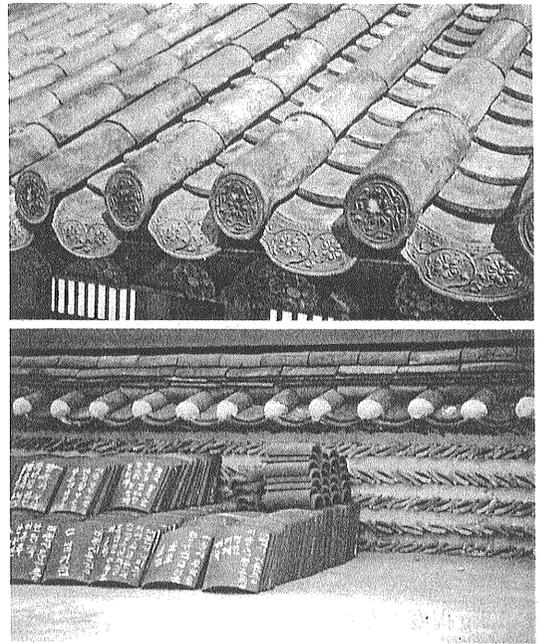


写真12 韓国太田市・東鶴寺の屋根瓦. もちろん本瓦葺きで, 塀の横に寄進者の名前が書かれた平瓦が積まれていた.

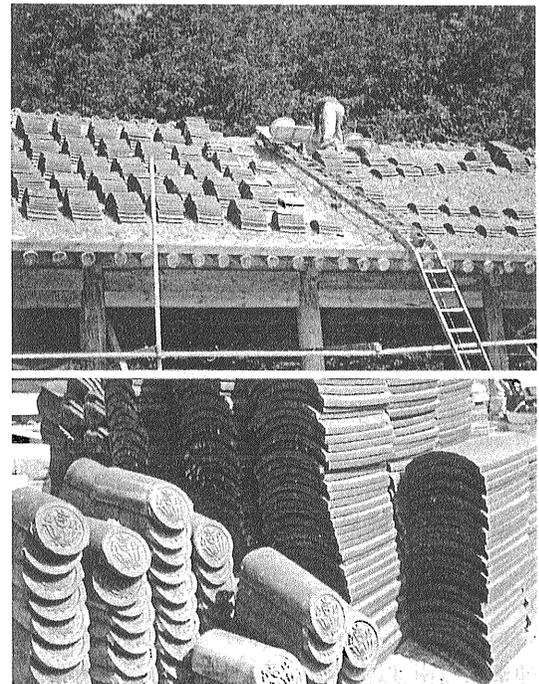


写真13 韓国・仏国寺での瓦葺き工事. 切り藁を混ぜた粘土を使って瓦を固定していく伝統的な土葺き工法である. 瓦はいぶし本瓦である.

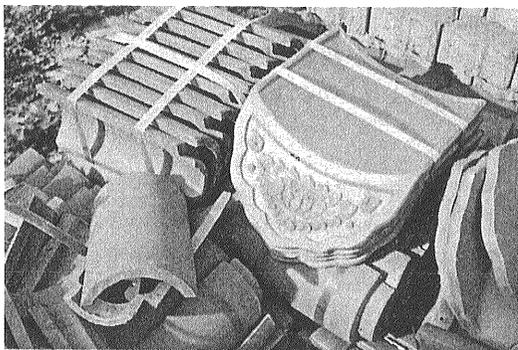


写真14 台湾製の瓦とその使用例。(上)丸瓦(あるいは筒瓦)と軒瓦の一種である滴水瓦がみられる。



写真14 台湾製の瓦とその使用例。(上)丸瓦(あるいは筒瓦)と軒瓦の一種である滴水瓦がみられる。台湾中部の豊原市で撮影。(下)平瓦と丸瓦を使った本瓦葺き。高速道路1号線のサービスエリアの付置公園の建物の例。

台湾では赤色の本瓦が多く生産されており、原料の粘土は中国本土の福建省あたりから輸入されているようだ。生産量は年間1千万枚程度と言われる。主に寺院や公園の建物などに使われている(写真14)。

最近10年くらい、都市の郊外に豪華な連棟式マンションが多く建設されており、これに色あざやかな陶器瓦が利用されている(写真15)。この瓦は日本から三州瓦が輸入されて使用されているそうで、輸入量は年間2,000万枚程度と推定されている(中小企業事業団,1999)。

(5) その他

北の方ではモンゴル・ウランバートル市内の仏教寺院の屋根は中国製の色鮮やかな本瓦葺きであった。

一方、南の方、ベトナムではかつての宗主国フランスの影響でかフランス型のセメント瓦が主流のよ



写真15 台湾の高級マンション。街の郊外の山の斜面に作られたリゾート兼用のマンション。屋根にはオレンジ色の三州瓦が使われている。台湾中部の豊原市郊外で撮影。



写真16 華麗なタイ・バンコクの王宮内の寺院。仏教の寺院であるが、屋根瓦の丸い形には、異文化を感じる。

うである(写真6)。タイの王宮や寺院では独特の円形の平瓦が使われている(写真16)。

瓦から見た東洋瓦の分布は、基本的には中国・朝鮮半島・日本であり、台湾の一部と沖縄を除く日本が主に和瓦、それ以外が中国式の本瓦と言えるようだ。

9. おわりに

身近な建材である「瓦」についてあれこれ調べてみた。日本の屋根には長い伝統に支えられた粘土瓦を中心に、さまざまな瓦がのっている。皆さんも瓦の歴史や形を思い浮かべながら、散歩の折にでも、家々の屋根を眺めて見てはいかがですか。き

っと意外な発見があるでしょう。

この瓦の話は資源屋のにわか勉強、不十分な点や、間違ったこと多々あるかもしれませんが。「こういう説が正しいとか、もっとおもしろい話がある」という方がいらっしゃいましたら、ぜひ教えて下さい。今回、瓦粘土の現状と将来を考えてみよう、三州・石州・淡路の各瓦工業組合などのご協力の基に各地の瓦工場を見学させていただき、多くの方にいろいろなことを教えていただきました。また全国瓦工業組合連合会には統計資料についてお教えいただき、各組合などのインターネット・ホームページも参考にさせていただきました。これら関係者の方々にお礼申し上げます。

今回は、粘土瓦はどんなふうになられているのか、どんな粘土が使われているのかななどを紹介し、今後、瓦粘土はいかに確保されるべきかを考えてみたい。

参考文献

中小企業事業団(1999)平成10年度産地等国際化指導事業報告書「地域産業の振興と国際化・島根粘土瓦」,40p.中小企業事業団.
Delos, E.F. (1954) Mineral resources of the Ryukyu-retto, 123p. USAF (アメリカ空軍) and USGS (アメリカ地質調査所).
田中 稔(1980)粘土瓦ハンドブック. 技報堂, 604P.
鳥居高夫(1991)粘土瓦. 21世紀に羽ばたくセラミックス(日本セラミックス協会), P.307-309.

SUDO Sadahisa (1999) : Roofing tiles (1) - their type, form and origin.

<受付: 1999年1月21日>

話題

瓦の公園メルヘン・パーク

最も標準的な瓦の1つである陶器瓦は、釉薬により赤・黄・青・緑・茶・黒などなどさまざまな美しい色を出することができるのが大きな特徴。この特徴を見てもらおうと瓦工場の屋根に瓦で夢のある絵を描いて「瓦の公園メルヘン・パーク」を作ってしまった工場がある。島根県大田市の(有)芝尾瓦工場である。

この「メルヘン・パーク」, 巾33m(瓦150枚), 長

さ120m(瓦428列)の大きな屋根に、50色の瓦、約7万枚を使って夢や動物・おとぎの世界が鮮やかに描かれている。屋根上の中央部に展望室が設けられ、そこから左右の棟の上にモダンな遊歩道が設けられ、その先端にはギリシャ神話に登場する女神と男神の像が飾られている。春と秋の遠足シーズンには幼稚園児や小学生でにぎわうという。

